

面平均値の有用性を検討する。

【表 1】

表 1 は、職業性ストレスの面平均値の有用性を検討するための調査結果を示している。

調査結果は、職業性ストレスの面平均値が、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

職業性ストレスの面平均値は、職業性ストレスの面平均値と相関関係を示している。

者で外科より小さい傾向（0.34対0.38）にあったが統計学的有意差は認めなかった。労働時間とBJSQの値はBの領域の総得点で最も相関関係が示唆されたが、有意差は認めなかった（ $P = 0.104$ ）。活動時間／勤務時間が増加するに従って素点換算表におけるA領域とC領域の合計点及びB領域の合計点は低下する傾向にあったがこちらも統計学的有意差は認めなかった。

【結 語】

加速度計は非常に鋭敏で夜中に起きた回数まで大まかに推定することが可能である。活動時間／勤務時間は夜間に呼び出される回数や患者対応を行なっている回数に従って増加すると予想される。労働時間における活動時間の割合を加速度計で評価することは、これらの因子を間接的に評価していたと考えられる。ゆえに1週間の勤務時間とは独立して、活動時間／勤務時間の増加がBJSQの点数の悪化につながったものと考えられるが統計学的有意差は認めなかった。さらなる検証が必要である。